

記念事業事務局 〒192-0914 東京都八王子市片倉町 703-3

Tel/Fax. 042-637-1345 (留守電にはご用件と連絡先を入れて下さい。後ほどお電話さしあげます)

Mail sakaikinen2022@gmail.com Web サイト <http://orgelkunst.org/>

[オルガニスト酒井で検索可]

桜の花吹雪から新緑へと季節が移っていきます。コンサートや祭りも従来どおり復活し、久々の出会いが嬉しいこの頃ですね。みなさまいかがお過ごしでしょうか。昨年秋からの動きなどお届けいたします。

《酒井多賀志追悼 第27回マンドリン音楽祭@秋田》 2023年9月17日開催

シタールによるレクイエムに始まり、マンドリン・ギターオーケストラ～古典ギターのバッハアカペラ演奏～オルガンソロ～マンドリン協奏曲「紅葉をめぐって」(恩地早苗氏指揮)まで、弦楽器と酒井作品で綴る充実したひとときでした。

700人収容のアトリオン音楽ホールにはフランス製のオルガンが入っていますが、酒井門下の会沢理恵・本久映子さんによる「流離」「一陽来復」がとてもよく響き、作品が蘇った感じがして思わず感涙いたしました。主催の平丈恵さんと秋田の皆様、東からも西からもお集まり下さったご出演の皆様に、心より御礼申し上げます。

《酒井多賀志の世界を巡る Vol. 1 ～マンドリンとオルガンの世界～》

酒井の命日近く、待降節に入った23年12月3日に、世田谷区松本記念音楽迎賓館にて追悼コンサートが開催されました。酒井が最後の春に演奏したゆかりの場所です。

彼の作品を再び生で聴けるとは思っていませんでしたが、平丈恵さんと酒井門下を中心に「酒井多賀志の音楽を継承する仲間達」が演奏して下さい、永遠の命の蘇えりを感じました。ありがとうございました。

「クリスマスの為の前奏曲とフーガ OP68」「故郷の主題による変奏曲 OP45」「一陽来復 OP74」「マンドリンとオルガンの為のイントロダクションとフーガ OP65」他、ヴィヴァルディのマンドリン協奏曲と、ヘンデルのソナタやビーバーのパスサリアが演奏されました。

オルガン製作者や生前にゆかりのあった方々、また長く自主企画コンサートにかよって下さった方々が駆けつけて下さり、早々に満席となりました。

なお収益は記念事業にご寄付いただいたことを感謝申し上げます。

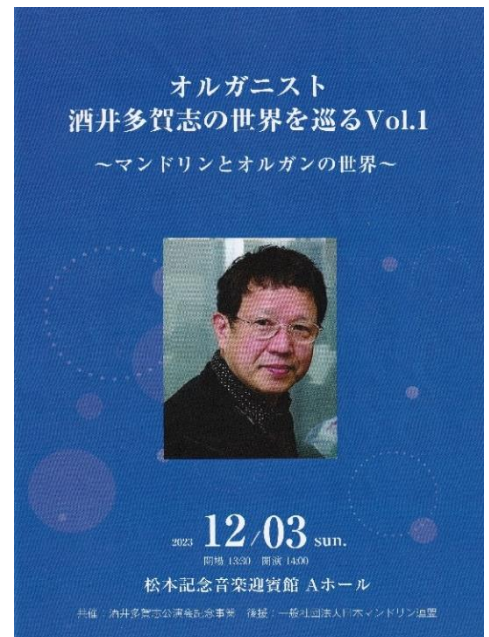
<当日アンケートより>

☆様々な方々の交流の場と酒井先生の音楽の融合した素敵な空間でした。

☆先生がどこからひょっこりお出ましになるのではないかと思います。皆様のお心のこもった演奏に聴き入っておりました。

☆オルガンとマンドリンの組み合わせに触れることはこれまでありませんでしたが、とても素晴らしい音色でした。

☆多賀志先生の作品の現代性と親しみやすさ、日本的なところに驚かされました。



《平山コンサート開催》24年6月2日(日)14時～ @平山クラヴィーア音楽研修所

演奏:平丈恵(マンドリン)、斉藤冴子(オルガン) 参加費 2,000円(茶菓付) <https://orgelkunst.org/news/1467>

「さくらさくらの主題による幻想曲」0P.58 (Org)、ふるさとファンタジー (mdl in)、他アンサンブル、楽器の体験コーナー等お楽しみ下さい。要予約 mandoline62tomo@gmail.com(平) or 090-9687-0139(斉藤)

◎次回は10月6日(日)を予定しています。

連載

《オルガニスト・作曲家 酒井多賀志のあゆみ》回想記(3) - 1 酒井正子

酒井はひらめきの人で、音楽活動の潮目も10年サイクルで変化していきました。

バッハ・フランクを軸とした古典～現代、バロック、そして自作自演や各種アンサンブルによる「世界音楽」へ。一見不連続なその軌跡は、彼の中では一貫した筋道が描かれるようです。しかしその全体像を知る人は決して多くはないでしょう。

筆者(妻・正子)は最も身近でその変遷を見聞きしてきた一人として、僭越ではありますが、彼の音楽的軌跡をたどってみようと思います。

いかにしてオルガニストとして形成され、いかなる表現をめざしてきたのか。彼のメッセージやインタビュー記事を参照しつつ、回想記を綴っていきましょう。

章立ては、おおむね以下のように考えています(紫文字は作品の略称)。

(1) オルガン前史; リードオルガンからの出発、オルガニストを志しカトリック吉祥寺教会を訪ね受洗。

(2) 1970年代; 芸大院在学中に万国博オルガンコンクール最高位入賞、以後演奏活動を開始。カテドラル・リサイタルシリーズの充実、日本の主要な音楽家・演奏団体と共演。バッハとフランクを中心に幅広いレパートリをとりあげ、この分野の第一人者としての評価を得る。

(3) 1980年代; 転換期、作曲に踏み出す。シュトゥルム&ドゥランク(疾風怒濤)の時代。

81年(33歳)より、完全音程(4度、5度、オクターブ)を主体とした中世オルガナムの技法で作曲を開始。瞑想的即興曲「流離(さすらい)」(1985)は初期の作風の集大成(92年OUPより楽譜出版)。他「光と風と波の心象」(1982)など。

★シュトゥルム合唱団・合奏団の指揮、チェンバロ演奏をとおして、バロック、古楽奏法の探求。

★尺八・箏とのアンサンブル開始(1987～)、CDアルバム「流離/SASURAI」に成果を収録。

★1984年武蔵野市民文化会館、89年純心江角記念講堂、91年府中の森芸術劇場のパイプオルガン設置に尽力。

(4) 1990年代; 作曲充実期。日本の五音音階のテーマを使って、バッハのようなフーガを作ろうと試みる。

「赤とんぼ」(91)、「アメイジング・グレース」(96)、「故郷」(97)、「夕焼け小焼け」(98)など。

対位旋律の工夫次第で、どのようなテーマでもフーガが作れることを確信。

★マンドリン(1990～)、奄美島唄(1992～)とのアンサンブル開始。オルガンと民謡の結びつきに着目。

★1998年、50歳で運転免許取得。デジタル・オルガンを軽ワゴン車に積み込み、出前コンサートを開始。

(5) 2000年代; 即興・変奏曲・フーガという三つの様式を組み合わせた、規模の大きな曲に取り組む。「さくらさくら」(03)「我は海の子」(05)、変拍子を用いた「イントロダクションとフーガ」(01)など。

★全国各地に出前コンサートを継続。

(6) 2010年代; 歌やマンドリン、和楽器とのアンサンブル曲に力を入れる。

★自主企画リサイタルの終了(No.50、2011まで)。デジタル・オルガンを使った小金井コンサート(2012～)、平山クラヴィーア音楽研修所の設立とホームコンサート開始(2017～)。

「クリスマスの為の前奏曲とフーガ」(2014)、「一陽来復」(2017)。

◎彼はバッハ・フランク等の古典と自作品を並べ、ともに響き合うようなプログラムを組んできました。「和洋の融合」に意を尽くしてきたのです。その軌跡は、日本近現代に於ける「洋楽の受容と自分たちの音楽の創造」という、文化史的にも興味深い問題を提起しているように思われます。

* * * * *

本題に入る前に前号《回想記(2)》の補足訂正があります(⇒赤字)。

◎バッハゼミ→バロック音楽研究会

東大駒場では、教養部(⇒教養学部前期課程)の1, 2年生を対象とした全学教養ゼミが花盛りであった・・

◎1977年、東大駒場900番教室に、火災で水を被った吉祥寺教会の(ヴァルカー社製)オルガンが補修、移設された。杉山好先生等の手で設置の運動がすすめられ、学内に「オルガン委員会」が組織された。

⇒実際には消防の放水を受けた楽器の修復は困難であったということです。以下Webサイトより引用します。
☆オルガン制作者望月広幸氏が作業にかかると、吉祥寺カトリック教会のオルガンはとても再生できるような状態ではないことが判明しました。このため、新たにドイツのシュケー社よりほとんどの部品とパイプを購入し、ほぼ新品のオルガンとして作ることになり、当初の予定より桁違いの出費を森泰吉郎氏(の寄付)に仰ぐこととなりました(中略)。設置には小山弘志教授をはじめとする教授会全体の熱意が効を奏したとのことです。 [東京大学教養学部オルガン委員会 <https://organ.c.u-tokyo.ac.jp/history.html>]

さて今回はいよいよ激動の(3)1980年代です。大きく85年「流離(さすらい)」初演までの<前期>と、それ以後の<後期>に分けられます。文字通り疾風怒濤の時代で、オルガンの古典から逸脱して音楽の森をさまよひ、81年(33歳)より作曲を開始した時期です。

以下では渦中の彼のことがばから、その心情をさぐってみましょう。☆は引用(要約・抜粋)、青字リンクはご参考までにあげました。

(3)-1 1980年代 <前期>

前回(2)の末尾は、以下のように終わっている。

☆1979年頃、「コンサートでバッハの曲を弾いている最中に、フッと自分はこの先何回バッハの(楽譜の)この部分を通過するのだろうかと考えてしまい、無性にいやになってしまった。」[1989int]

そして「日本でヨーロッパ音楽中心に演奏することの物足りなさや、疑問がわき起こり始め、それは日に日に大きくなっていった」[メッセージB]。

これは、そもそも70年代の中頃、ホールの関係者から、「もっと聴衆に分かりやすい曲を弾いてもらえないか」といわれたことがきっかけだったという。

☆今日、過去において絶対的力を持っていた権威は、いたる所で相対化されつつある。模倣の時代は終わったのである。<我々のための芸術>は始まっているのだ [実況録音LP評 1980]

☆ヨーロッパの音楽ばかりを演奏することに嫌気がさし、それ以来もっと日本人の心を直接うたった曲がほしくなり、自作自演の活動を続けています [ふたば会 pro. 1989]。

☆楽譜にある音をその通り弾くことに、神経的な疲労を感じるようになったのです。何かに自分を合わせるというだけでなく、自分そのものを出してみたくなりました。 [新時代の音楽家達 1982]

この「新時代の音楽家達」は、磯山雅氏によるインタビュー記事で、大変興味深く、一読をおすすめしたい。「これからの音楽界を根本から支えるひとり」として彼を紹介。元旦生まれの彼の「どこか松の内的な陽気さ」から始まって、初期のオリジナル作品の評価にも言及。「若い人の強い支持が集まっているようだが」(磯山)

に対して、「おかげさまで好評だが、こんなこともあった」と彼は言う。

☆練習中に「すごくきれいな曲だね、それ誰の曲？」と聞かれ「これぼくの曲だよ」と言ったら、その人、とたんに白けちゃってね（笑）

つまり同じ日本人がやった作曲や演奏にはファンタジーがわからない、という日本の音楽界の現状があるというのだ。彼が独自のバッハの演奏様式を打ち出しても、ヨーロッパ（本場）の演奏の代用品という以上には、なかなか受け止めてもらえない物足りなさもうっ積していた [日本のクラシック音楽の危機・・・1986]。のちに彼はこの時期を、次のように総括している。

☆1970年代、20歳代前半だった私は、バッハの音楽に心酔し、彼のすべての作品を30歳代半ばまでにマスターしようと考えていました。

しかし70年代の後半になって、バッハの一部の作品に違和感を感じ始めました。意味も無く長く感じられ、それが「野暮」に見えてきたのです。また「トッカータとフーガニ短調」のような、間のとり方で表現する曲は意外と少なく、多くの曲は、拍子が限定されていて、窮屈なのです（=自由リズムもほしい）。またバッハの音楽には、自然の情感を感じさせる季節感が無いこともストレスでした。前述の30歳代半ばまでの計画が次第に白けてきたのです。この違和感は、実はヨーロッパ音楽全体の特徴でもあります。

一方日本の作曲家といえば、当時は（無調音楽など）アバンギャルド全盛の時代であり、私の感覚とはかけ離れていました。オルガン曲の傑作は、ほとんどがオルガン演奏の名手によって作曲されている事実を考えると、作曲家に頼むよりも自分で作曲した方が確実だと思い、1981年（33歳）より自作自演に踏み切りました。

完全音程（1・4・5・8度）を主体とした中世オルガナムの技法で作曲を開始。東洋の音楽とも通ずるところのあるこの技法をとおして、オルガンと日本の美意識を結びつけようと思いました。瞑想的即興曲「流離」（1985）はその方向での集大成です（92年にはオックスフォード大学出版局より楽譜出版）。現在までの私の作品の中で最も人気の高い曲で、海外でも演奏されています。[私とオルガン2 2006]

創造のよろこびの一方では苦しみ、悩みも多かった。出身小学校から「卒業生 int.」を訪れたちびっ子記者たちに、彼はその苦悩を語っている。

☆今までは、僕にとっては、バッハが一番の大輪でしたが、そのためには、いつも自分自身がバッハになるという緊張感を持っていなければなりませんし、ナマの自分とは違うと感じますね。そこで自作自演を始めました。そして今が一番苦しい時です。目標とするモデルがないため、すべて自分でやらなければならないからです。そんなことから不安でストレスがたまります。

ある時持病の喘息が悪化して救急車のお世話になったこともあります。そこで体力作りということで玄米菜食を始めました。玄米は一口ごとに50回以上かむので、・・・クビのあたりが寂しく風が抜けてゆくって感じ・・・。それで髪を伸ばし始めたんですよ（写真）。



[86 武蔵野二小 同窓会報]

長髪の酒井多賀志

1982年か83年の春先だったと思うが、アレルギー性喘息の発作が止まらず、ついに救急車で虎ノ門病院まで運ばれた。「もう30分遅かったら、血中の二酸化炭素の濃度が高くて命があぶなかった」と医師に告げられ、その後溝の口の分院にしばらく入院。帰ってきてからは近所の断食道場にかよい、玄米菜食を知る。体質改善のた

め桜沢如一氏の「マクロビオティック料理」を実践し、家族も一緒に玄米を食す。

83 年末には筆者（正子）の島唄研究のため、奄美・徳之島に初めて家族そろって渡った。その時圧力鍋や玄米を現地に送ったことを憶えている。この頃はジョギングにも励んでいた。

82 年 4 月からは東京純心女子短大の非常勤講師として勤務する。当時短大2年生だったオルガニストの米沢陽子さんによれば;

☆先生のもとでオルガンを学んだ日々は、衝撃と驚きの連続でした。

固定観念にとらわれない言動、斬新な発想、何より躍動感に満ちた演奏。

「こんなに生き生きとバッハを奏でることができるのか！」 レッスンでお手本に弾いてくださる演奏も楽しみでした。

そして、レッスンの合間にもよく自在に即興演奏をされていました。代表作の瞑想的即興曲「流離 Op. 17」をはじめ、まだ作品として完成する前のオルガンの音が、当時の純心の校舎に響きわたっていたのは今でもよく覚えています。[Kunugi（純心同窓会報）V41, 2020]

初めて4月の入学式にのぞんだ時は、藤色のトレーナー姿で現れ、どよめきがおこったという。これは、自分のペースでいくぞ、という決意表明みたいなものだった、と彼は語っている。

さてオリジナル作品の初演は 81 年 11 月 23 日の、自主企画リサイタル No.17「バッハと今～新しいオルガン音楽の可能性を求めて」@東京カテドラルだった。OP.1 完全音程を主体にした 3 つの作品 を演奏、翌 82 年3月<カテドラル・オルガンの夕べ>でも、ブクステフーデ、パッヘルベル、バッハに続いてこの3曲をとりあげている。

☆今日、作曲におけるあらゆる技法は究めつくされており、新しい表現をおこなうことが困難であるといわれている。私自身も、つい最近まで、つまらないものを作曲するよりも、演奏に集中し、過去の巨匠達の作品を最高度に表現する方向が、私にとってより良い選択であると考えていた。

しかし、すべてを極め尽くした過去の偉大な作品にも、決して包み込めない巨大な世界がある。

それは無意識の世界である。

演奏家は、過去の作品に対して、楽譜をとおして意識的にアプローチするほかない。そこに自身の無意識の世界を表現することはできない。この居心地の悪さは、演奏と作曲が分離した、きわめて最近のことに違いない。

我々は、この分離を解消し、ひとりの人間の中に、意識的な分野（楽譜に書かれたものを演奏する）と無意識的な分野（即興演奏、又は作曲）を獲得しなければならない。

新しい可能性は無意識の世界と関わりあう中に存在する。・・・我々は、自分の心の暗い海へ、つり糸をたれて、じっと待つような状態を自分の中に持たなければならない。その時そのつり糸にひっかかってくる物は、はたして何かはわからない。・・・

心理学者によれば、無意識の世界は、我々の心の奥で、意識的な世界の裏側とつながっているという。私がヨーロッパの巨匠たちの音楽と意識的に関わっている間に、私の心の内面で、いかなる音楽が醸成されていたのか、私自身興味ある所である。

☆今回「完全音程を主体にした作品」を書いたのは、完全音程の中に、我々の心の深い所で、無意識の世界とつながっているものがあるように思えたからだ。完全音程とは、1度、4度、5度、8度だが、これらの響きは、オリビエ・アラン（M.クレール・アランの兄で音楽学者）によれば、すべての民族に共通してみられる響きだそうである。

・・・5度の響きは、確かに空虚であるが、それだけに、何か永遠から永遠に至るまで鳴り響いている遠い水平線のように感じられる。この中に3度の音を加わると、とたんに響きは現実的になり、今、ここに、という実在感がもたらされる。

私の音楽においても3度はしばしば登場する。それは不協和音としてであり、それらは、4度、又は5度に解決するのである。これは原理的には、中世のオルガナムに似ている。私がこの一連の作品を書き始めたきっかけは、ペロティヌスのオルガナム「神の救いをみたり」を、デラー・コンソートが演奏するのを聴いた事が刺激になっていたようだ。・・・[当日プログラム]

【82年～85年「流離」初演までの足どり】

▽82年は3月カテドラル、5月ヨハネ受難曲(指揮)、7月チェンバロリサイタル No.3、11月 Org リサイタル No.18「二人の巨匠とともに～自作自演の世界」と続き、6月の定例の Org リサイタルは中止。

▽83年も同様のペースで、3月のカテドラルは、初めて自作品のみで構成。OP.3 [交響的即興曲「光と風と波の心象」](#)などで、作品は OP.6まできていた。5月はヘンデルのメサイア(指揮)、7月チェンバロ、11月リサイタル No.19「二人の巨匠との対話」と続く。

▽84年は3月カテドラル、5月短調ミサ曲(指揮)、6月 Org リサイタル No.20「バッハと私の世界」(ソプラノと共演)。12月 No.21「伝統の流れを受けて」。新設の武蔵野市民文化会館(小)にて、武蔵野の自然を謳った新作 OP.16「ふる里の詩3章」初演。

▽85年はバッハ生誕 300年を受けて、6月リサイタル No.22「バッハとその先輩たち」はバロックの魅力再考。11月 No.23「バッハとロマン派の流れを受けて」で「流離」初演に至る。

(この頃は東京カテドラルの「オルガンの夕べ」の他、秋田・名古屋の教会コンサートに毎年レギュラーで出演、合間に多くの依頼コンサートを受けていた。)

◎このように、バッハ・フランクを軸に、これまで演奏してきた曲と自作品を行きつ戻りつしながら精度をあげ、その立ち位置を吟味しながらすすんでいく。そして満を持して「流離」の初演にもっていったのである。

その間、無意識の解放から新作へ、しだいに新曲が肉化し、根をおろしていく手ごたえ、それとともにバッハなど従来演奏してきた古典にも、新しい自在な境地を見いだすようになる。

以下プログラム等から抜粋してみる。

◎No.18「二人の巨匠(バッハ・フランク)とともに～自作自演の世界」 1982.11.12

☆無意識の世界は、表現することはできないが解放することはできる。そう信じて私は、昨年以來、作曲活動を始めたのである。

ヨーロッパ近代はあいまいなもの、混沌とした情念を排除し、明確化してきた。しかしその発展も限界に達し、瑞々しい要素はもはやない。一方日本にいる私たちは、彼らが切り捨ててきた価値や情感が多くあることに気づくことができる。

日本人の心の中にやどる独特の情感も、ヨーロッパ人が過去にきりすてたものの中にある。それをヨーロッパ中世の音楽の中に発見することがあるが、私としては、何もヨーロッパ中世に目を向けるよりも、私個人に宿る情念を追求してみたいと思っている。

☆作曲を始めて一年の間に、私の作風もどんどん変わってきている。「完全音程・・・」の OP.1 では、無意識の世界に向かってはいても、まだヨーロッパの残像が明確に残っていた。今回の OP.2 [通奏モチーフを用いた3つの作品](#)あたりから、私の独自性が顔をみせはじめているように思われる。それとともに私の中で、楽譜に音を明記するのがだんだん面倒くさくなっていることに気づく・・・

こうしてみると、即興演奏・作曲というのは実に楽しい。しかし、私がそれのみに浸りきっているならば、やはりそれは独り言でしかない。フランクやバッハという、意識的な作用から生まれた高度な作品と関わりを持ったその直後に、無意識の世界が解放されるならば、そしてそれがヨーロッパの長い伝統に対して、全く別な新鮮さにより感動を与えうるものであれば、それ自身の芸術的目的は充分果たしたと言えるのではないだろうか。

今日のプログラムは、そうした意味で、二人の巨匠の作品と私の作品とを交互においてみた。

◎カテドラル・オルガンの夕べ「自作自演の世界」1983.3.6

☆作曲を始めて一年たち、新しいものを生み出す喜びや苦しみを味わった。ロック、ジャズ、電子音楽、演歌、ポップ、ニューミュージックその他、今まであまりふれた事のない音楽を、聞いたりうたったりしてみると、大変魅力的で、まるで日本に留学に来て新しいものをみたような気持ちになる。

そうこうするうち、町の中で普通に鳴っている音楽と、私がとりくんでいるクラシック音楽の間に、ある深いみぞがあることに最近気づいてしまった。クラシック音楽には一人称と三人称の関わりはあるが、二人称の関わりが、あまりにも希薄である。普通の音楽に脈打っている「あなた」又は「君」の表現がないのだ。クラシック音楽はうつろいやすい「私」や「あなた」よりも、もっと普遍的な表現を求めている、という人もいるが、普遍的表現は、「私」と「あなた」の表現の深まった結果として、無意識的に到達するものであろう。

今は私も、「目に見える兄弟を愛せない者は、目に見えない神を愛することはできない」というヨハネの言葉に共感して、「あなた」の表現を求めてみたいと思う。

◎No.19「二人の巨匠との対話」@東京カテドラル 1983.11.23

☆・・・J.S. バッハと C. フランクの二人は、私がオルガン音楽に関わり始めた最初の時から、私の心をとらえて今日まできている。・・・私自身も自作自演という手段において私自身の世界を持ち、私なりの語法を身につけるようになって、始めて以前より純粹に、また落ち着いた心で、バッハやフランクの作品が語ろうとしていることに耳を澄ますことができるようになってきたように思える。・・・[当日プログラムより]

☆自作自演の試みも早いもので3年目を迎えます。

東京カテドラルの響きを熟知した中からほとぼり出る音の波は、いままでオルガンがうたったことのない歌を奏でてくれる。ある時は激しく、ある時は深い海のうねりのように、またある時は澄み切った大気の中に憩うようなくつろぎに身をゆだねる快さ。この喜びをぜひあなたとわかち合いたく・・・[公演会ニュース 24]

◎カテドラル・オルガンの夕べ「自作自演の世界」1984.3.4

☆「自作自演のめざすもの」

今回は、昨年に続いて2回目の自作自演のコンサートです。

作曲を始めて3年たち、自作自演にもやっと慣れ、「自分の世界」というものを自然に語れるようになって来たように思います。私は自分の作品においては、心に湧いたものを、あまり分析したりせずそのまま音楽として流してゆくのが好きで、特に日本音階や日本らしさを意識して追求してはいません。しかし出来上がったものをみていると、やはり日本的な感じがしているのが不思議です。昨年、「光と風と波の心象」を聞いて「まるで大和路を散策しているような印象を受けました」というコメントを聴衆の方からいただき、その言葉が大変気に入っています。日頃私たちが住んでいる街の景色とか、そこで生活している人々の表情、会話のリズム、その裏に流れる感情等は、今までヨーロッパの作品のみを演奏してきた私には、あまり意識にのぼらなかった事ですが、自作自演をやるようになって、急に現実味と親しみをもって感じられるようになり始めたのです。・・・

バッハやベートーベンの音楽は、日本に来て100年近くたちます。今日洋服を、誰もヨーロッパの服とは意識していないように、それらも日本に帰化した音楽と言って良いはずですが、しかしだいたいは、ヨーロッパの演奏様式を輸入しているのが現実です。そろそろ日本の気候、風土、土地の感情を土台とした演奏スタイルが登場しても良い頃でしょう。

私は、自作自演を、私自身の世界として完結させ、それを見極めようとする一方、大好きなバッハやフラン

ク、ブクステフーデやパッヘルベルの音楽を、日本の風土に自然にとけこんだ新しい創造的な様式で演奏するという可能性を推し進めたいと思っています。

芸術表現の自己目的は、それを行う人の中にあるはずですから。[当日プログラム]

☆バッハやフランクの古典的名曲における演奏スタイルが、自分の中で非常に明確なものとなり、自作品においても、ある一つの世界が形成されてきた感じがしている。久しぶりに完全燃焼できたコンサートだった。

[公演会ニュース 25]

◎No.20「バッハと私の世界」@石橋メモリアルホール 1984.6.8

☆・・・今回新しく「ソプラノとオルガンの為の3つの詩篇」Op. 11 を発表します。

オルガンのみの抽象的な作品は、私の中で大きくひろがってゆく遠心力として働いています。一方言葉による限定された方向を持つ声楽曲は、反対に求心力として私自身に作用することでしょう。この遠心力と求心力の動的緊張関係を知覚し、生み出すことは、現在の私にとって生きている証ともいうべき課題なのです。・・・東洋人としての私は動的な緊張関係を二元論的にとらえるのではなく、相対的な流れの中に位置づけ瞑想的な営みのうちに一元的にとらえ展開させる方が自然であるように思います。「私の世界」は長い間バッハを演奏しつづけてきた私の中で醸成されたものです。

◎No.23「バッハとロマン派の流れを受けて」@武蔵野市民文化会館(小) 1985.11.9 ※「流離」初演

☆・・・20世紀初頭以来、新即物(客観)主義、歴史主義を経て、現代は再び「心的表現」と関わりを持つ時代に入ったのではないか。

「心的表現」がもたらす「陶醉」をかつての現代音楽作曲家たちは極端に嫌った。しかし我々が嫌うべきは「陶醉」ではなく「悪酔」だ。そのバランス感覚は多くの「悪酔い」の体験から自らが学びとるものでありましょう。

バッハからロマン派に至る作品と関わりあいながら、それを我々日本人の日常の音楽と共存させ、その対話の中から私なりの作品が生み出して行ければ最高だと思っている。時には、ややバランスを失って「悪酔い」に陥ることがあったとしても、それは一つの体験として、将来を信じていきたい。・・・[当日プログラム]

☆84年末にオープンした武蔵野市民文化会館(小)の響きは、大変透明で明晰であるにもかかわらず、暖かく柔らかい残響を持った素晴らしいものです。[公演会ニュース No. 30、85.5]

以上バッハ生誕300年の85年に初演した「流離」まで、彼の模索の旅は続く。そして「流離」以後は、「これなら生きていける」という確信を語るようになる。

◎No.25「バッハとフランクの精華」@武蔵野市民文化会館(小)1986.11.15

☆・・・バッハとフランクは、私自身のオルガン演奏の核であり、すべてでありました。

81年以來の自作自演により、その2つの核の中に、私自身という3つめの核が融合されたのです。これによって私は生きていける確信(これなら一生やっていける)を持てるようになったのです。

ヨーロッパ音楽を最良のものと思っている方々の中には、「酒井多賀志は、よけいな事をやり始めた」と思った方もいらっしゃるかもしれません。

しかしずっと継続して見守って下さっている方も少なからずおられます。そのご支援のおかげで、この6月に自作自演のコンサートも開くことができました。

かつては、バッハとフランクの作品の背景にある様々な事を知ることが、新しい演奏を生み出すきっかけになりました。私はそれなりによく勉強したつもりですが、すべてを知り尽くしてしまったあとには何が残るだろう、という不安に常にさいなまれていました。現在では、生きている私自身の体験とともにバッハとフランクが変化しつづけられるなら、私は生涯かけてこの二人の作品の表現を深めてゆくことができると確信

しています。・・・

彼はこの頃にはかなり余裕をもって、自分の心境を語るようになる。少々長くなるが引用してみよう。

◎バッハ町、フランク町、自作自演町のお話 [公演会ニュース No30、1985. 5]

☆現在、私は3つの町を行ったり来たりしています。これらの3つの町は、それぞれ魅力を感じる時と、「おら、こんな町ヤダー」と言いたくなる時があります。

先ずバッハ町にて、お、すごい、さすがバッハ親父の貫禄、緊張感、たまらない刺激、頭の芯までツーンとくる。すごいね、こりゃあ、最高だね。——しばらく時間がたって—— なんだいこのフーガってやつは、さっきから聞いてりゃ 16 分音符が絶え間なく喋りやがって、こっちは窒息しそうだ。それに、おれには何も言わしてくれねえ。バッハ親父の強引な刺激はもうたくさんだ。勝手にしゃべってろい。

そしてフランク町に行きました。

おや美しい旋律だねえ、聞き惚れちゃうねえ。お、極彩色のあざやかなハーモニー、さすが花のパリの雰囲気だねえ。

フランク母さんととても優美だよ。話してりゃあとでも豊かなニュアンス(転調)で丁寧に語ってくれるねえ。おふくろさんの暖かさを感じるよ ——ここでしばらくして—— しかし、あの循環主題ってやつ、ずっときかされていると嫌んなるねえ。どうどう巡りで結論の出ない長話みたいじゃねえか。それにどうしておふくろさんはそんなに濃い情念でいつも話をするんだい。たまにはあっさり断定してくれよ。心が重くなってくらあ。

気疲れして自作自演町へ。

やっぱり我が家は気楽でいいねえ。風の通りはいいし(3度を抜いた完全音程のみを協和音としている)、伸び伸びしてらあ。食いたいものは食い放題だし(即興の自由が多い)、うるさく言うやつもいねえし(まだ分析の対象になってない)、いつ寝起きしてもいいし(拍節リズムがなく、自由リズム)、やりたい放題だもんな。——ここでしばらく気楽な時をすごすが、やがて——

何だ何だ、そろそろ体がなまってきたぞ、いくら自由でも自分一人だけじゃ面白くねえや、とって、おらの町に若いもんは誰もいねえし(興味ある現代作品がみあたらない)、しかたねえ、又あのがみがみのバッハ親父の所へ行ってみるか。さっきはあまりうるせえんで聞く耳持てなかったけどよ、根はいい人だし、結構いい事も言うようだし、ひとつ本腰を入れて聞いてやるか。ついでにフランクかあさんの町にも行って優しさに甘えるかわりに、あの長話にも、ある程度つきあってやる事にしよう。あんな風に優柔不断だからこそ優しく振る舞えるのかもしれないもんなあ。

てな調子を繰り返しながら今日も、今のところ平和な日々が過ぎていっているのです。

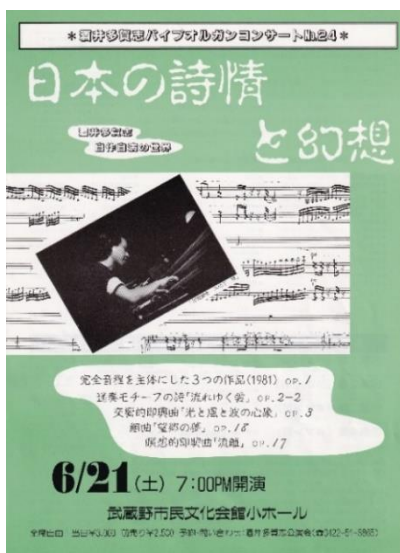
【追記】 自作品のみの初の自主企画コンサートは、86~87年に、OP.18までの集大成として開催された。

酒井多賀志自作自演の世界 ①<https://youtu.be/MhGkMII2GYI>

②<https://youtu.be/X4Of5MrPVhE> ③ <https://youtu.be/hVpZhXIKjlo>

☆「自作自演がめざすもの」 [No. 24 プログラムより]

1981年から自作自演をはじめて5年経ちました。初期の頃は、楽譜に書かれたものを忠実に演奏しようとする意識的な束縛からの自由を求め、無意識の世界を解放しようと努力していましたが、やがて '82年の秋ごろから、クラシックの音楽の中に二人称的な「あなた」の表現があまりにも希薄なのに愕然とし、ヨーロッパ的な普遍性を重視する三人称の美意識からの離脱を試み、うつろいゆくものを追い、はかないものの情感を表現しはじめました。最近では、日本の自然な姿に視点を置き、常日頃、私達の心を何気なくよぎ



るものに焦点をあて、そこに潜む、昔ながらの日本人の情念を表現してみようとしています。

出来上がった作品を見わたしてみると、作曲している時には別に意識していませんでしたが、それぞれの曲に、それが生まれた時の季節の情感が反映されているのを感じます。日本に於ける芸術にとって、季節感というのは昔から、不可欠ですが、私自身、これを無意識に楽しんでいました。

* * * *

⇒次号(3)－2へ続く。80年代<後半>の和楽器との共演、シュトルム合奏団・合唱団の活動等を予定しています。

《記念事業の活動 23年9月～24年5月》

●ニュースレターNo. 1～4までは、Webサイトの「記念事業について」の頁にリンクがあり、「お知らせ」からもご覧いただけます。 (<http://orgelkunst.org/> にて)

●文献アップ追加；Webサイトのトップ頁→酒井多賀志のあゆみ→[プロフィール・略年表と文献リスト](#)をクリック。略年表の下、文献リスト内「[原版はこちら](#)」をクリック。磯山雅氏との対談(1971、1982)、自著「オリジナルを作曲する喜び」(1991)、「私とオルガン」(2006)が新たにご覧いただけます。

●楽譜；オリジナル作品のコンスタントなご注文をいただいています。最近では和楽器アンサンブルの購入希望も目立ちます。楽譜をご注文の方には、酒井の遺志により自筆の運指譜もお分けしています。

またバッハ・フランク等、生前演奏していた楽譜に自筆で運指をふった楽譜をお弟子さん方のご協力を得て整理し、クラヴィーア音楽研修所にて順次公開いたします。長年使い込まれ愛用してきた運指譜を、手にとってごらんいただけるようになります。

●クラヴィーア音楽研修所と楽器の保全管理

研修所利用にあたっては登録が必要です。Webサイトよりお問い合わせ下さい。

楽器のメンテナンスも随時おこなっています。

●協賛活動；酒井作品を取り上げた演奏会・関連企画に対して、Webサイトに掲載するなど広報に協力しています。ご関係の方は事務局までご一報ください。

《Youtube「酒井多賀志公演会 記念事業」チャンネル》 新規公開 23.09～

♪2023/12/13 公開 ★四周忌を記念して

<尺八・箏・オルガンの出会い>シリーズ(1)

・<https://youtu.be/NW5EZuMVFSk> オルガンと尺八の為の「古謡組曲」Op.21(1987) *和楽器シリーズ第一作

・<https://youtu.be/AMmNTxgoUak> 「オルガンと尺八の為の対話」Op.22(1987) *初演

・<https://youtu.be/PUQVj1wzLsl> オルガンと箏の為の瞑想曲「里の空」Op.24(1988)

「鳥や蝶が舞う如く優雅に躍動する邦楽器の美しさは、今まで聴いたこともないほど新鮮で、信じられないほど自然にスムーズに調和している」と、その可能性に驚喜しています。

(なお和楽器シリーズは引き続き公開していく予定です。)

♪2024/5/10 公開 オルガンリサイタルとミサ曲の夕べ@秋田カトリック教会、1998年4月

<前半><https://youtu.be/suXZo4CEfLo> <後半>https://youtu.be/2trzB_B_Cqk

秋田連続コンサート21年目。早春譜 OP47、谷川の水を求めて OP36、故郷 OP45、トッカータとフーガ二短調、前奏曲とフーガ短調・変ホ長調、コラール第2番など、充実のプログラムです。

聖堂の明るい光の中に電子楽器を置き、ななめ上から撮影。演奏の様子、手足の動きがよく見える画期的な映像です。解説もマイクによく入り、字幕を添えて、冗談混じりのくつろいだ話がお聞きいただけます。

<今後の公開予定>

- ・奄美島唄との共演@大島郡瀬戸内町立図書館、@徳之島町文化会館
- ・酒井多賀志指揮・チェンバロ；シュトルム合奏団定期演奏会
- ・季節の酒井作品；春、夏、秋、クリスマス、新年 ほか

《音 信》 新旧のおたより・コメントを抜粋してご紹介させていただきます。

▽岡崎淑子さんより（20年12月）

酒井多賀志記念事業ニュースのお知らせをいただいてから大分日がたってしまいました。

先生の作品や演奏の全容を見せていただきながら、あらためて先生の情熱の深さと広さを感じています。

私はやはり「[流離（さすらい）](#)」を何度も何度も聴きたいと感じます。この曲から伝わってくるエネルギーは、先生がこれだけ豊かに、多くの作品を創り、演奏され、遺されてきても、まだまだこれからなさいたいことがあったに違いない、と偲ばれます。

▽八谷裕子さんより（23年9月）

酒井多賀志先生の演奏は、純心大学でのコンサートで一度聴かせていただいたことがあります。

ご自身で作曲された壮大な宇宙を感じる曲を聴いた時、その音楽の大きさに度肝を抜かれたのと、酒井先生の才能の凄さ、魂の格の高さを感じたのを思い出します。

その翌年位のクリスマスコンサートも、先生の演奏を楽しみに伺ったのですが、急遽出演キャンセルとのことで残念に思っておりました。後から先生が亡くなられたことを知り、ショックを感じておりました。

▽森山紅子さんより（23年12月）

疲れた時でも先生の曲が流れると、スッと身体が軽くなりその場が浄められます。

この大きな愛に包まれた感じは先生のお人柄そのものですね。パイプオルガンから放射状に降り注ぐ光による神殿を、先生は人の心の住まう建築とたとえていらっしゃいました。

本当に大きな器を残して先生は居なくなってしまいましたが、その器はいっぱいの愛で満たされていると感じます。

▽片山尚子さんより（24年2月）

実は、高校から大学に入った頃に、酒井多賀志さんのオルガンを武蔵野文化センターホールで聴いたことがあり、その立体感、彫りの深さに圧倒されました。

対談 [[バッハの大きさ](#)]（*あらたにサイトに掲載）を読み、その立体感が、レジストレーション（ストップ決め）から来ているのではなく、アゴーギクとアーティキュレーションを以て酒井さんが歌詞のアフェクトを表現なさろうとしていたことによる…と今知り、感動。

この人の演奏を是非また聴きたいと、はたち前後のわたしは鮮烈に直感しましたが、最初で最後の経験でした。

（*この対談は71年、院在学中におこなわれ、バッハの様式や宗教観など、興味深い内容が語られます）

▽サイモン・ニーミンスキーさん（在シドニー、St Mary's 大聖堂オルガニスト）より（24年4月）

私は2016年と17年に日本国際オルガン・フェスティバル (<https://iofj.net>) に招かれて演奏し、16年には光栄にも酒井多賀志氏とお会いすることができました。

実はその前から、私は酒井氏の「[古謡組曲とフィナーレ OP.21B](#)」を演奏してきました。というのも私が数年前ロンドンの the Royal College of Music の学生だったとき、同級生の一人に、酒井氏の弟子の日本人オルガニストがいて、

この作品を演奏し、作曲家の許可を得て私に楽譜のコピーを下されたからです。

私はこれを何年にもわたって何度も演奏してきましたが、来月には南オーストラリアの歴史的なオルガンを使ってCDに収録する予定です。

オルガン独奏版 OP.21B では、バッハの主題を省略し、弟子のため新たに作曲した「フィナーレ」が追加されています。最近 YouTube 掲載動画より、オリジナル版 OP. 21 は尺八とオルガンのためのものであったことを知り、とても興味をそそられ、魅了されました。 <https://youtu.be/NW5EZuMVFSk>

この記念事業により、彼と彼の音楽についてもっと知ることができるのは素晴らしいことです！ www.niemin.ski

▽田中京子さんより (23年1月)

オルガンと尺八の為の「古謡組曲 OP.21」は、お言葉どおり、オルガンと尺八が信じられないほど自然にスムーズに調和して、快く耳に、否 心の中に入ってきました。

1987年の作曲とは、40歳位の時ですから、若さと円熟さが混じり合い、力強さを感じました。元気をいただける作品だと思います。

[以上、ありがとうございました]

<ニュースレター バックナンバーのご案内> リンクをクリックして開いて下さい。

[記念事業ニュース No.1はこちら→](#)

[記念事業ニュース No.2はこちら→](#)

[記念事業ニュース No.3はこちら→](#)

[記念事業ニュース No.4はこちら→](#)

<おことわり>

「記念事業ニュース」はご縁をいただいた方にお送りしておりますが、今後お受け取りを希望されない場合はご提供を中止致しますので、事務局までご一報くださいますようお願い申し上げます。

なおご提供されました皆様の個人情報は、第三者に預託、提供は致しません。